

入学期における児童の小学校生活への適応に関する研究 (最終報告)

渡辺 良勝¹ 伊野 真司¹

子どもの発達や学びの連続性を保障するために、円滑な幼小接続が求められている。本研究は2年間にわたり、入学期に焦点を当て、児童の小学校生活への適応に向けた具体的な手立てを探った。研究1年目に作成したスタートカリキュラム(試案)に基づき、参観や聞き取り調査を行った結果、児童の小学校生活への適応のためには、幼児教育の考え方を取り入れた学習活動を展開することが有効であることが分かった。

はじめに

子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼小が円滑に接続することや、児童が小学校入学後に不適応を起こす小1プロブレムの解消が求められている。

平成16年の中央教育審議会幼児教育部会において、「学びの連続性を踏まえることの必要性」が示され、総合教育センターでは、平成17年度に「幼・小、小・中の校種間連携の研究」に取り組んだ。その中で、生活科を取り上げ、幼小連携のカリキュラムを開発した。

その後、教育基本法や学校教育法の改正、幼稚園教育要領・小学校学習指導要領の改訂、保育所保育指針の改定があり、その経緯の中で、幼稚園・保育所等と小学校との連携・接続を積極的に図ることが一層求められるようになった。また、幼児教育の充実や学校段階間の円滑な接続の実現に向けての考え方や方策等が示されてきた。

しかし、文部科学省が平成21年11月に行った調査では、「ほとんどの地方公共団体(都道府県教育委員会100%、市町村教育委員会99%)が幼小接続の重要性は認識(文部科学省 2010)しているものの、その「取組は十分とは言えず、都道府県教育委員会の77%、市町村教育委員会の80%において幼小接続のための取組が行われていない(文部科学省 2010)」ということが、幼小接続の課題として挙げられた。

平成22年11月には、文部科学省より「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」(以下、「報告」という。)が出され、その中でも、子どもの発達や学びの連続性を保障するために、幼・小の円滑な接続の重要性が改めて示された。

神奈川県では、平成19年度から公立幼稚園のある市町村を対象に、「小学校と就学前教育の連携の推進研究」を実施し、幼小連携・接続の課題解決に向けて取り組んできている。その研究成果として、神奈川県教

育委員会は、「まなびと学びをつなぐ 小学校と就学前教育の連携」というタイトルで、平成21年3月に実践資料集を、平成23年3月に指導資料集を発行した。研究を推進する中で、その取組を継続する難しさや幼・小の教育の違いについて十分な相互理解がされていないことなど、新たな課題も見えてきた。また県内には、公立幼稚園だけでなく、私立の幼稚園や保育所から入学してくる子どもが多い地域もあり、私立の幼稚園や保育所と小学校との連携を図ることも課題として挙げられた。

そこで本研究では、幼小連携・接続に関する現状や課題と、現行の幼稚園教育要領・保育所保育指針・小学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、小学校の入学期に焦点を当てた幼小連携・接続の在り方を探ることに取り組んだ。本稿は、平成24・25年度の2年間にわたる研究の最終報告である。

研究の目的

前述のとおり、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続については、その重要性が認識され、全国的にも多くの取組がなされている。しかし、文部科学省主催の「幼稚園教育理解推進事業【中央協議会】」における各県からの実践報告では、取組が日常の教育活動に十分いかされていない、どんなに良い取組をしても継続されていかないといった課題が挙げられている。

入学期における児童が小学校生活に適応するという事は、友達や教師、上級生などと望ましい人間関係を築く中で、児童が主体的に学習に取り組み、様々な力を身に付けながら成長していくための第一歩を踏み出すことだと言えよう。そして児童自らが、小学校が自分たちの新しい生活の場であると、実感を伴って自覚した状態が適応だと考える。

そこで本研究は、幼児期の教育と、小学校生活のスタートである入学期における小学校教育の円滑な接続の在り方を探り、児童が小学校生活に適応できるよう

1 教育課題研究課 指導主事

になるための具体的な手立てを見いだすことを目的とした。

研究の内容

1 研究テーマについて

新入学児童は、新しい環境において、友達や教師と一緒に楽しい学校生活を送りながら成長したいという願いを持っている。教師も同様に、新入学児童と一緒に様々な学習活動を展開する中で、多くの力を身に付けさせながら、児童を成長させたいと願っている。このように考えると、児童と教師の願いは同じ方向を向いていると言える。しかし近年、入学直後の児童が、小学校生活にうまく適応できない状況が見られる。いわゆる小1プロブレムである。

では、なぜ小1プロブレムのような状況が生まれるのだろうか。その理由として、子どもを取り巻く社会や環境の変化、幼児期の教育の在り方等が挙げられてきているが、本研究では、小学校教育が幼児期の教育を十分理解しないまま、入学期の教育活動を行ってきたことも原因の一つではないかと考えた。

平成17年1月の中央教育審議会答申では、各学校段階において、その役割をしっかりと果すことの重要性和学校段階間の円滑な接続に留意する必要があることが示されている。また、学校教育法には、「幼稚園は義務教育及びその後の教育の基礎を培うものであること」と示されている。こうしたことから考えると、小学校教育がその役割を果たすためには、小学校教育の基盤となる幼児期の教育を理解することが必要だと言えるのではないだろうか。

本研究では、小1プロブレムの解消を目指すわけではない。重要なことは、子どもの発達や学びの連続性を保障するための具体的な手立てを見いだすことである。そのことにより、児童が小学校生活へ適応していくことが実現できれば、結果として小1プロブレムの解消につながっていくと考えている。

これらのことから、「入学期における児童の小学校生活への適応に関する研究」という研究テーマを設定した。

2 2年間の研究の概要

(1) 研究1年目の取組

研究初年度の平成24年度は、幼小連携・接続に関する国や県の動向や、具体的な取組現状を調査し、その内容を把握・分析するとともに、課題を整理した。

また、先行研究を参考に、幼小接続の時期や児童が小学校生活に適応した具体的な姿について検討した。そして、本研究における「入学期」を、3月下旬から7月中旬と設定し、「適応」については、望ましい人間関係を通して、小学校が自分たちの新しい生活の場

であると児童自らが実感を伴って自覚した状態だと整理した。

研究を進めるに当たっては、入学期の児童の学校生活の様子、教師の指導の工夫や児童への関わり方等についての情報収集を目的として、平塚市立港小学校(以下、「港小学校」という。)の協力を得て、第1学年担任への聞き取り調査及び参観を行った。

また、幼児期の教育の理解と現状を把握することを目的として、文部科学省主催の協議会や神奈川県教育委員会主催の研修講座に参加し、幼小連携・接続を図る実践事例について情報の収集をするとともに、平塚市立港幼稚園(以下、「港幼稚園」という。)及び平塚市立須賀保育園(以下、「須賀保育園」という。)を対象とした参観等も行った。

そして、これらの取組から得られた情報を基に、入学期における児童の小学校生活への適応に向けた具体的な手立てとして、スタートカリキュラム(試案)(以下、「試案」という。)を作成した。

研究1年目の取組の詳細については、平成24年度の間接報告を参照していただきたい。

(2) 研究2年目の取組

研究2年目となる平成25年度は、1年目に作成した「試案」の考え方を踏まえて、入学期の児童の様子を観察するとともに、1年生担任への聞き取り調査を行った。

「試案」は6月以降の聞き取り調査と参観に基づいてまとめたものであるため、その考え方や活動内容等を入学期の児童の実際の姿に照らして、検証する必要がある。つまり、「試案」の考え方を踏まえて参観することにより、その活用方法や改善点を見だし、より実践的なスタートカリキュラムを完成したいと考えたのである。

また、研究1年目の課題であった、幼児期の教育の理解に向けて、公立・私立の幼稚園や保育所を訪問して参観や聞き取り調査を行い、そこから幼児期の教育と小学校教育とのつながりを見いだした。

これらのことを踏まえて、入学期における児童の小学校生活への適応に向けたスタートカリキュラムを作成した。

次項以降、2年目の取組の詳細について述べる。

3 参観及び聞き取り調査(2年目)について

平成24年度に引き続き、港小学校の協力を得て、1年生の学校生活の様子を参観し、聞き取り調査も実施した。参観に当たっては、1年生担任と事前打合わせを行い、研究の目的、内容、研究計画について確認し合った。

(1) 港小学校での参観について

参観は、4月から7月にかけて計8回行った。その概要は、第1表のとおりである。

第1表 参観の概要

期	訪問日	内 容
第1期 (※)	第1回 4/10(水)	○朝の会…連絡帳の提出、 ○1時間目…国語：あいうえおをよむ・えんぴつの使い方 ○2時間目…算数：1～5までのかず ○下校時の様子
	第2回 4/19(金)	○登校時の昇降口の様子 ○朝の時間…読書タイム ○1時間目…国語：みつけたよ ○2時間目…算数：かずとすうじ ○中休みの様子 ○3時間目…生活(学年)：対面式の練習 ○4時間目…音楽：一年生になったら ○給食…配膳・食事・片付けの様子 ○清掃・昼休み・帰りの会の様子
第2期	第3回 4/23(火)	○対面式の様子(全校) ○朝の会 ○1時間目…学活：楽しい給食 ○4時間目…算数：かずとすうじ ○給食…配膳・食事・片付けの様子
	第4回 5/15(水)	○登校時の昇降口の様子 ○朝の会 ○1時間目…国語：ふたとぶた(濁点の付く言葉) ○2時間目…体育(学年)：運動会の練習(綱引き) ○3時間目…生活：さつまいもの苗を植えよう ○4時間目…算数：なんばんめ ○給食…配膳・食事・片付けの様子
第3期	第5回 5/24(金)	○1時間目…体育(学年)：運動会の練習(ダンス・徒競走) ○2時間目…道徳：運動会の約束
	第6回 5/25(土)	運動会 ○徒競走・綱引き・ダンス・全校玉入れ等の種目と応援席や入場門での様子
	第7回 6/14(金)	○1時間目…学活：係りカードを作ろう ○2時間目…国語：みんなにしらせよう
	第8回 7/11(木)	○登校時の昇降口の様子 ○朝の会 ○1時間目…音楽：ポップコーン・うみ・三拍子のリズム ○2時間目…国語：大きなかぶ(読みの工夫と動作化) ○3時間目…算数：ひき算 ちがいはいくつ ○4時間目…外国語活動：AETによる、はじめての活動 ○給食…配膳・食事・片付けの様子 ○5時間目…国語：大きなかぶ(劇ごっこ)

※表の中の、「第1期」等の表記は、後述するスタートカリキュラムの三つの期間を表したものである。

ア 参観を通して見取った具体的な児童の姿

参観は学習場面を中心に行ってきた。それは、学校生活で一番多く時間を費やす授業において、児童が自分の力を発揮したり、楽しみながら学習に取り組んだりするというような、小学校生活へ適応したと言える

具体的な姿を見いだしたいと考えたからである。参観を通して、次のような児童の姿を見取ることができた。

【学習面】

- ・児童が教科書や鉛筆、算数セットのブロックやおはじき等を楽しそうに使っている姿から、児童には、入学初期から学習したいという欲求があると感じた。
- ・読み聞かせや朝顔の水やりなど、興味・関心の高い活動には、集中して意欲的に取り組むことができていた。
- ・国語の助詞の学習では、文や絵などの提示資料に興味・関心を持ち、意欲的に学習に取り組んでいた。
- ・入学当初、学習規律や学習用具の準備等に関する指導が繰り返し行われたことより、児童の学習への意欲は低下していた。

【生活面】

- ・自分たちの給食について考える学習では、入学後の給食の経験を振り返りながら互いの考えを話し合うことで、自分たちでできることは自分たちでしようという意欲が見られた。
- ・靴の履き替えやトイレ、水飲み場の使い方等は、入学当初から時間は掛かるが自分の力でできていた。
- ・6月中旬頃の児童の様子からは、小学校生活のリズムや施設の使い方等において大きな困り感を抱いている児童はほとんど見受けられなかった。

イ 参観を通して見取った教師の関わり方

学習場面における教師の児童への関わり方からは、適応に向けた有効な手立てを見いだしたいと考えた。参観を通して、次のような場面を見取ることができた。

- ・手遊びや読み聞かせ等を朝の会や学習の導入に取り入れ、児童の学習意欲を高めていた。
- ・朝読書で二人の児童が本を取り合いになった時、二人の言い分を聞くとともに、学級全体に投げかけ、解決方法を見いだす話し合いを行った。その結果いくつかの解決方法を見いださせることができていた。
- ・遠足で楽しかったことを伝え合う国語の学習では、児童が遠足の様子を思い出す手掛かりとして、写真を効果的に提示していた。
- ・学習準備や授業規律等の指導に関しては「はじめが肝心」という考え方で、指導のために学習時間の多くを費やしていた。
- ・教科書とノートを、毎時間同じように準備させるのではなく、その時間に必要な学習用具だけを準備させることで、スムーズに学習に入っていかなせることができていた。

ウ 参観を通して見いだしたこと

参観を通して一番感じたことは、児童が「小学校へ入学したら勉強したい」という願いを入学当初から持っているということである。そして、幼児期に身に付けてきた力を発揮させることで、その意欲は高まるが、

反対に学習準備や授業規律の指導が重なることで低下することもあるということが分かった。また、幼児期と同様に、興味・関心があることには積極的に関わり、集中して活動できることも確認できた。こうした児童の姿から、安心して小学校生活を送っていることを感じることができた。

児童が安心感を持ち、楽しみながら学習に取り組むためには、教師の関わり方が重要である。幼児期の教育で行われていた読み聞かせや手遊びなどを学習に取り入れたり、児童の興味・関心を高めるための視覚的な情報を提示したりするなどの工夫が、入学期の授業づくりに有効であることも確認することができた。

(2) 港小学校での聞き取り調査について

聞き取り調査は、3月から12月にかけて計7回行った。その概要は、第2表のとおりである。

第2表 聞き取り調査の概要

期	訪問日	内 容
第1期	3/28(木)	事前打合せ ○研究の目的、内容、研究計画の説明 ○第1学年担任との顔合わせ ○第1回参観の内容確認
	4/10(水)	第2回参観の内容確認
第2期	4/23(火)	○学級活動の実践の振り返り ○第4回以降の参観・撮影の内容確認
第3期	6/7(金)	○参観に関する分析結果の報告 ○研究目的と内容の再確認 ○スタートカリキュラム(試案)の活動案の実践について ○今後の取組に向けて(国語の活動案の提示)
	6/19(木)	○国語の活動案実践に向けて(ねらい・内容・活動の流れ等の確認)
第3期以降	8/29(木)	○参観や聞き取り調査から得た情報に関する整理・分析結果の報告 ○スタートカリキュラム作成方針の確認
	12/20(金)	○研究経過報告 ○研究のまとめに関する確認

ア 入学期における教師の願い

聞き取り調査では、参観を通して見取った具体的な児童の姿や教師の関わり方に基づいて、児童の小学校生活への適応に向けた授業づくりについて話し合った。話し合いを通して、毎日の授業づくりに対する教師の願いを聞くことができた。

- ・一日を終えた時、児童が「今日は〇〇の勉強をした」と言えるような学習を展開したい。
- ・もっと多くの時間を児童と一緒に過ごすことに費やしたい。
- ・児童が意欲的に学習に取り組むための具体的な手立てを、もっと知りたい。
- ・入学初期は特に、教材研究や児童理解等に関する学年打合せができるように、年度当初の会議や打合わせを精選して欲しい。

イ 聞き取り調査を通して見いだしたこと

入学期の参観とそれに基づいた聞き取り調査を行ったことで、年度当初の1学年担任の校務状況を改めて確認することができた。1年生担任は、児童の学校生活の充実に向けて教材研究や児童理解をしたいという願いを持っていても、その時間の確保が難しい状況であることが分かった。

限られた時間を有効に使い、教育活動を実践していくためには、入学初期の短期間で全てのことを行おうとするのではなく、児童の実態を踏まえて、短期的・長期的なねらいを明確に持ち、見通しを持って教育活動を展開していくことが重要である。

スタートカリキュラムの実践に当たっては、1年生担任が中心となる。しかし、聞き取り調査の内容から、1年生担任の教育活動をサポートするために、学校全体の協力体制を整えることが必要不可欠であることも分かった。

(3) 幼稚園・保育所の参観及び聞き取り調査

幼児期の教育を理解することを目的として、平塚市内の公・私立の幼稚園・保育所の参観と聞き取り調査を実施した。

ア 参観について

平成24年度に私立幼稚園・保育所の参観を実施していないことから、平成25年度は、港小学校に入学する予定の幼児のいる平塚学園松風幼稚園(以下、「松風幼稚園」という。)と社会福祉法人徳栄会花もんもん保育園(以下、「花もんもん保育園」という。)において参観を実施した。その概要は、第3表のとおりである。

第3表 参観の概要

実施日	平成25年11月20日(水)	
対象園	松風幼稚園	花もんもん保育園
参観内容	○登園 ○朝の会 ○誕生会 ○クリスマスツリーづくり	○体操指導 ○自ら選ぶ活動 ○給食

2園の幼児の活動の様子から、幼児が身に付けている力と教師の環境構成の工夫の視点で次のようなことを捉えることができた。

【幼児が身に付けている力】

- ・登園後、制服から活動しやすい服装(体操着)に自分で着替えて、着替えた制服を自分のロッカーにしまうことができていた。
- ・着替えを終えた幼児は、朝の会が始まるまでの間、絵本や図鑑を読んだり、絵を描いたりしながら過ごしていた。
- ・誕生会を行うホールに向かうとき、幼児は教室の後ろに移動し、手を叩いて前へならえをしながら二列に並んでいた。その後、教師の引率で静かに移動することができていた。
- ・誕生会を迎えた幼児の話を、静かに聞くことができていた(15分程度)。

- ・体操指導では、動物の格好をまねたストレッチをしたり、歩いたり走ったりする内容を行っていた。動物をイメージすることで動きが分かりやすく、楽しく活動ができていた。
- ・マットや平均台を使った運動の時には順番を守って活動することができていた。
- ・体操指導が終わると、みんなで用具の片付けをした。大きい物や重い物は数人で協力して片付けていた。
- ・給食の配膳では、幼児がご飯の盛り付けを行っており、全員のご飯の量が同じくらいになるように、デジタル秤で計測しながら盛り付けていた。初めのうちは一回で既定の量を盛り付けることは難しかったが、徐々に一回で盛り付けられるようになってきた。

【環境構成の工夫】

- ・松風幼稚園の朝の会では、その日の予定を書き込んであるミニホワイトボードを教師が提示し、幼児に見せながら一緒に予定の確認を行っていた。
- ・松風幼稚園でのクリスマスツリーづくりでは、幼児が制作しやすいように、全幼児分の牛乳パックに、教師が切り取り線を入れておくといった準備がなされていた。
- ・花もんもん保育園の年長児クラスでは、小学校と同じタイプでサイズが小さめの一人用の机を使用していた。朝の会は、小学校と同じような机の並び（スクールスタイル）で行い、その後の活動では、机を4・5脚合わせてグループの形（グループスタイル）にしていた。
- ・花もんもん保育園では、午睡をしなくても大丈夫な年長児が取り組む活動（読書・言葉遊び・数字遊び等）が掲示されていた。

参観を通して感じたことは、松風幼稚園、花もんもん保育園共に、できる限り幼児に自分の力で活動させること意識しているということであった。また、幼児には話を聞く力や自分の身の回りのことを自分でできる力が、おおむね身に付いていることも分かった。

複数の幼稚園や保育所から入学してくる小学校では、公立と私立、そして幼稚園と保育所との違いを擦り合わせるのに苦労していると聞く。確かに園によって生活の仕方や遊びの違い、飼育や栽培等の活動、中には楽器演奏、英会話や文字・計算等を学習するような園もあり、幼児が体験するものには違いがある。また、施設や設備等にも違いがあるだろう。しかし、あいさつや着替え、自分の持ち物の片付けなど、基本的な生活習慣に関する力は、公私・幼保による大きな差はあまり見られなかった。

小学校教員が入学期初期に意識したいことは、各園での経験の違いを擦り合わせようとするよりも、各園で幼児が身に付けてきた力を、どのようにいかすことができるのかということを考えることである。

イ 聞き取り調査について

聞き取り調査は、平成24年度に幼児の様子を参観した、港幼稚園と須賀保育園で実施した。その概要は、

第4表のとおりである。

第4表 聞き取り調査の概要

実施日	平成25年11月20日（水）	
対象園	港幼稚園	須賀保育園
聞き取りの視点	<ul style="list-style-type: none"> ○年長児に卒園までに身に付けさせたい力 ○力を身に付けさせるために行っている援助・環境条件の整備等の工夫 ○幼児期の教育の理解に向けて、小学校教員に知って欲しいこと・理解して欲しいこと 	

聞き取り調査を通して、2園の年長児クラスの教師から、次のような具体的な情報を得ることができた。

【卒園までに身に付けさせたい力】

- ・話している人の目を見ながら、話を聞く力
- ・自分の気持ちを話し言葉で伝えられる力
- ・友達関係でのトラブルを乗り越えていける力
- ・自分の力でやってみようとする思いをもって、自分で生活を作っていけるような力
- ・時間やルールを守ることができる力
- ・食べ物に興味を持つこと、よく噛むことや食するときの姿勢に気を付けるなどの食育に関する力

【力を身に付けさせるために行っている援助・環境条件の整備等の工夫】

- ・幼児に話す時はゆっくり話している。
- ・トラブルを自分たちで解決できるように、時間はかかっても、まず話を聞くことを心掛けている。
- ・幼児が、活動の見通しを持てるような言葉掛けをしたり、ミニホワイトボードを使って視覚的な情報を示したりする。
- ・活動に対する幼児のイメージが膨らむような言葉掛けをしたり、幼児が活動に必要と思うようなものを準備したりしておく。
- ・幼児と一緒に過ごす時間は、幼児の表情を見ながら接し、その時の気持ちを理解しようと心掛けている。
- ・教師同士で話し合いの場を持つようにして、幼児理解について共有し、連携を図っている。

【小学校教員に知って欲しいこと・理解して欲しいこと】

- ・園での生活の様子をもっと知って欲しい。
- ・幼稚園では幼稚園教育要領を基本としている。遊びを通して学ぶという学習スタイルが違うことを理解して欲しい。
- ・当番活動を通してできるようになっていることがあるので、入学後に力を発揮させて欲しい。
- ・幼児の失敗や間違いを、寛大に受け止めて欲しい。
- ・子どもとの信頼関係を築くために、授業時間だけでなく、ほかの時間帯にも子どもと一緒にいて欲しい。
- ・小学校に送付する幼稚園指導要録や保育所児童保育要録（以下、「要録」という。）には、一人ひとりの発達の状況やその子に有効な関わり方などが記載されているので参考にして欲しい。

聞き取り調査の具体的な内容を見ると、幼児は、幼児期の教育において小学校教育の基盤となる様々な力

を身に付けてきていることが分かった。例えば話を聞く力を身に付けさせるために教師は、幼児が理解できる言葉を選んでゆっくり話したり、視覚的な情報を示して見通しを持たせたりするなど、幼児の発達の段階を踏まえた環境の構成を工夫している。また、幼児の表情を見ながら話をじっくり聞くなど、時間的な余裕を持って接している。教師は、幼児に寄り添った関わり方を通して、幼児との望ましい信頼関係を築きながら教育活動を行っていることが分かった。

幼小の滑らかな接続を図るには、幼稚園教育要領や保育所保育指針を基に幼児期の教育を理解することに加えて、教師の幼児に対する思いや願いを理解することも重要な要素だと言えよう。

4 スタートカリキュラム

(1) 作成に向けて大切にしたい考え方

スタートカリキュラムは、幼小の円滑な接続を図るための手立ての一つである。小学校学習指導要領解説生活編には、「総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校に生かすことが小1プロブレムなどの問題を解決し、学校生活への適応を進めることになるものと期待される」（文部科学省 2008a）との記述がある。

幼児期の教育は、環境を通して行うことを基本としている。教師は、幼児の活動や生活が豊かなものとなるように環境を構成し、その環境に幼児が主体的に関わる中で、様々な力を身に付けられるようにしてきている。

入学初期においては、1年生はゼロからのスタートであるとか、教えないと児童は育たないなどと考えるのではなく、幼児期の教育の考え方にある、望ましい環境に幼児が主体的に関わる中で、幼児の発達が促されるという考え方を取り入れた教育活動を行う必要がある。

小学校の教師も、児童が幼児期に身に付けてきた力を発揮しながら学習活動を展開していける環境を、意図的・計画的に構成することが必要である。このような考え方から、入学初期では、幼児期の教育の要素を生かした教育活動を入り口とし、徐々に小学校教育へと移行を図っていくようにすることが望ましいと考える。

本研究で示すスタートカリキュラムは、児童の小学校生活への適応を長期的な視野に立って進める必要があると考え、4か月間にわたるものとしている。それは、児童の発達には個人差があり、短期間の画一的な指導によって適応が図られるものではなく、児童一人ひとりを大切にされた柔軟な対応をする中で適応を図っていくことが重要と考えるからである。また、教師が長期的な見通しを持つことで、時間的・精神的なゆとりの中で児童と接することができるという利点もある。このような考えから、4か月間を第5表のとおり三つ

の期間に分け、各期間にねらいを設定し、見通しを持って適応実現を目指すことができるようにした。

第5表 入学期の三つの期間とねらい

期	期間・ねらい
第1期	3月下旬頃～4月中旬頃 ○児童が小学校生活に対して抱えている不安を取り除き、安心感を持てるようにする
第2期	4月中旬頃～5月中旬頃 ○児童の経験や考え方・感じ方の違いをいかして、新たな生活を主体的に作っていけるようにする。
第3期	5月中旬頃～7月中旬頃 ○児童に教科学習の楽しさを味わわせながら、主体的に学習に取り組めるようにする。

ここに示した三つの期間は、はっきりと区別できるものではない。各期間で教師が意識したいことを明確にすることにより、児童がスモールステップを踏みながら、徐々に小学校生活に適応していけるための目安として考えたものである。

さらに各期間のねらいの実現に向けて、各週のねらいや毎日の学習活動を計画していくことで、児童の小学校生活への適応を着実に図ることができると考える。そして、夏季休業を迎えるまでに、小学校生活への適応をおおむね実現できることを目指している。

(2) 入学期の三つの期間のポイント

ア 第1期

入学初期の児童は、小学校に入学したとはいえまだまだ幼児である。一つひとつの活動をするにもある程度の時間を要する。そのような発達の段階にある児童を、短期間で小学校教育のスタイルに引き込むことは、不適応を起こす原因となる。

例えば、「はじめが肝心」という考え方から、入学初期に学習規律や施設の使い方等の指導を目的とした学習を集中的に行ったり、必要以上に繰り返したりすることは、「小学校へ行ったら勉強したい」という児童の願いに答えていないばかりではなく、児童の学習意欲を低下させることにもなる。

学習規律や施設の使い方等は、一回の指導で身に付くものではなく、毎日の経験を積み重ねる中で習慣化され、身に付いていくものである。靴箱やロッカー、水道やトイレなどの施設に関していえば、児童は、同じものではないにしろ、それらを全く使ったことがないわけではない。入学初期における指導は必要だが、それ自体を学習の中心として設定することには疑問を感じる。朝の時間を活用して指導したり、学習活動の中で、使用する必然性を児童が感じることで身に付けられるような場面を設定したりするなどの工夫が必要だと考える。そして、短期間では身に付けることが難しい児童に対しては、言葉による指導に加えて写真などの視覚的情報を活用したり、一斉指導後に教師が個別に援助したりするなどの工夫が有効である。児童と教師との信頼関係は、時間的なゆとりを持ちながら児

童一人ひとりに対応することによってつくられてくるのである。

このように考えると、第1期は、学習規律や施設の使い方の指導に重点を置くのではなく、生活科を中心とした合科的な指導の中に、児童が幼児期に経験してきている楽しさを伴う活動を多く取り入れた学習を展開することが重要だと言える。

そのためには、児童が幼児期にどのような教育を受け、どのような力を身に付けてきたのかを「キャッチ」する必要がある。このことは、小学校において前学年の教育活動や児童の実態を踏まえて指導計画を立てることと同様に、それらの情報を得ることにより、教師は、新入学児童の実態に即した学習活動を設定することができるからである。

情報収集の手段としては、3月下旬頃に行われる幼稚園や保育所との情報交換、幼稚園や保育所等から送付された、「要録」をはじめとする引継ぎ資料から、一人ひとりの児童が幼児期に育ってきた過程や発達の姿をあらかじめ捉えておくことが考えられる。ここで気を付けたいことは、記述内容から児童に先入観を持つのではなく、児童一人ひとりの育ちをつなぐために、育ってきた過程を理解することである。

具体的な活動例としては、生活科の「みんなともだち」の単元で、運動場で遊ぶ活動が考えられる。広い運動場に出て友達と遊ぶことは、児童にとって幼児期に毎日していた活動であり、楽しく遊ぶことを通して安心感を持つことができる活動でもあろう。

この時に教師は、ただ遊ばせていけばよいわけではない。生活科の内容(1)「学校と生活」の「友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活ができるようにする」(文部科学省 2008a)ことを踏まえた活動にしなければならない。さらに教師は、児童一人ひとりを観察する中で、「のびのびと遊んでいるか」、「どんなことに興味・関心を示しているか」、「何ができて、何ができないのか」等を丁寧に見取る必要がある。児童が興味・関心を示したり、気付いたりすることの中には、文字や数に関すること、動植物や季節などの自然に関すること、遊び方やルールに関することなど、教科学習につながる学びの芽がある。この学びの芽は、第2期、第3期の教科学習に関連付けたい学習の材料となる。

こうした児童の姿を引き出すために教師は、教材との出合わせ方や環境構成の工夫をするとともに、入学期における各教科等の系統性を見通しておく必要がある。各教科等の系統性を把握していれば、児童が見出した学びの芽を、いつ、どの教科で、どんな学習活動を展開できるかという見通しをもつことができ、第2期、第3期において、児童の思いや願いをいかした教科学習につなげることができるのである。

また、運動場への行き来の際に靴の履き替えをする

中で、靴箱の使い方を学ばせたり、遊びが終わった後のうがい・手洗いの場面で、水道の使い方を学ばせたりというように、必然性のある場面で施設に触れさせることを通して、施設の使い方の指導をするようにしたいものである。

第1期は、児童が幼児期に身に付けてきた力を発揮することで、「小学校でも自分にはできることがある」と児童が実感し、安心感を持って学校生活を送ることができるようになると言える。

イ 第2期

第1期を終える頃には、児童は小学校生活の1日の流れをおおむね理解し、教室・座席・靴箱・ロッカー等、自分が使う場所や物にも慣れてくる。また、担任が自分の話を聞いてくれたり、困ったときに助けられたりした経験から、安心感を持って学校生活を送ることができるようになってくる。そうした中で、第1期では同じ幼稚園や保育所出身の友達と遊んでいた状況から、第2期では同じ学級の新しい友達と遊ぶなど、交友関係に変化が見られるようになる。

そして第1期で得られた安心感から、少しずつ自分の気持ちを言葉や行動で表現するようになり、児童同士の関わりの中で、互いの経験や考え方・感じ方の違いに気付くことになる。このことがきっかけとなり、トラブルが起きることが予測される。

そこで第2期は、児童の経験や感じ方の違いを生かして、生活上の課題を自分たちの力で解決させながら、少しずつ新たな生活(ルール)を主体的につくっていくことをねらいとする。

児童同士のトラブルが起きたときに教師は、常に「トラブルは新たな学びのチャンスである」という意識を持って解決に当たりたい。その際に、教師の一方的な指導で解決をするのではなく、できる限り児童の言い分を聞き、経験や考え方・感じ方の違いを互いに受け止められるように、どうしたら解決できるだろうと投げかけ、児童に考えさせることを通して、解決を図りたい。それが新たな生活(ルール)を作っていくこととなり、児童の学びとなるのである。

こうした経験は、生活場面だけで見られることではない。学習場面においても児童は、学習課題に対して自分の考えや感じたことなどを表現し、話し合いを通して学習課題を解決する。

この時期の児童が課題解決をするには、思考力・判断力・表現力等が自分の思いを中心としていることから、時間が掛かることが予想される。また第2期は、健康診断や対面式、家庭訪問や避難訓練などの学校行事が続き、児童も教師も慌ただしさを感じる時期でもある。短時間で解決したいあまりに、教師の一方的な指導で解決してしまうと、児童が自分たちの力で解決する学びの機会を奪ってしまうことになる。教師は、トラブルや学習課題を解決することと同時に、課題解

決の仕方を学ぶことの大切さを十分認識しなければならない。

トラブルや学習課題を解決する経験を積む中で児童は、自分たちの力で解決できたことの喜びを感じるとともに、課題解決の仕方を学ぶ。また、課題解決を通じた友達との関わりの中で、児童同士の信頼関係を築いていくのである。第2期は、児童一人ひとりの経験や考え方・感じ方の違いを表現させる中で、自分たちの力でトラブルや学習課題を解決できたと実感させることが、小学校生活への適応につながると言える。

ウ 第3期

第3期は、三つの期間で最も長い期間であり、小学校生活への適応をおおむね実現させる期間である。

この期間は、生活科中心の合科的な学習から、各教科に分化した学習が展開される。第2期までに比べて、教科書やノート、ワークシートなどを使い、椅子に座って学習する時間が長くなっていく。また、時間割を見て次の学習の準備をすることや、休み時間にトイレを済ませておくなど、小学校教育のスタイルに徐々に慣れてくる時期でもある。

しかしながら、先に述べたとおり児童の発達には個人差があるため、第3期に入ったからと言っても、児童の中には、まだ学校生活に不安を抱いていたり、学習規律や施設の使い方などが十分身に付いていなかったりする児童がいることも予想される。そこで教師は、必要に応じて、入学してから第2期までの学習を振り返りながら第3期の学習を進めていく必要がある。

その際に有効なことは、これまでに見いだした学びの芽を各教科に関連付けたり、生活面・学習面での課題を自分たちで解決する力を発揮させたりすることである。また、学校によっては遠足や校外学習、運動会やプール開きなど、児童にとって楽しみとなる学校行事も行われることから、児童の学校生活への期待感を教科学習にいかすことも考えられる。

そのために教師は、児童のつぶやきや表情、しぐさ、教師との会話等からキャッチした児童の具体的な姿から学習時の児童一人ひとりの反応を予測し、思いや願いをいかした学習を計画する必要がある。

そこで第3期は、学習に対する児童の思いや願いをいかして、各教科等の楽しさを味わわせながら、主体的に学習に取り組めるようにすることをねらいとする。

児童は各教科等の教材と出会う中で、「面白そうだな」、「これは何だろう」という思いや、「どうしたらできるようになるかな」、「やってみたいな」といった願いを持つ。この思いや願いは、各教科等の目標を意識したものではなく、単純に興味・関心に基づいたものである。児童が主体的に学習に取り組むようになるためには、学習指導要領や教科書に示されている内容から扱うという考え方よりも、教師が予測した、教材と出会った時の児童の反応に基づき、児童が無意識の

うちに学習指導要領や教科書に示された内容と結び付くような指導計画を立てるといった考え方をすることが重要である。

こうした学習をする中で児童は、自分が見いだした学びの芽、思いや願いが認められたことにより、満足感を抱くことができる。また、入学後にできるようになったこと、分かるようになったことなどから自己の成長を実感し、小学校での学習が自分を成長させてくれたことに気付く。そして、「明日も学校へ行きたい」という意欲や、友達と遊びたい、一緒に学習したいという思いや願いを持つようになり、望ましい人間関係の中で、小学校生活へ適応していくのである。

(3) 各期間の具体的な内容（週案例・活動案例）

ここからは、スタートカリキュラムの考え方と三つの期間のポイントを踏まえて作成した活動案を示す。

ア 第1期：小学校生活に安心感を持つこと

入学式直後の数日間、児童は小学校生活に期待と不安を抱きながら登校してくる。そのような児童の不安を軽減するためには、幼児期の教育で行われている、遊びを通しての指導というものを取り入れたい。

第6表は、生活科において、広い運動場で友だちと一緒に伸び伸びと遊ぶことを通して、新しい友達や教師と楽しく関わり、安心感を持たせることをねらいとした活動案である。

第6表 生活科活動案

単元名	みんななかよし
活動のねらい	運動場に出て遊具や砂場等で遊ぶことを通して、それらを利用する楽しさやよさを感じたり、友達や教師と会話をしながら楽しく安心して遊んだりすることができる。
いかに児童が身に付けてきた力	<input type="checkbox"/> 自分が興味・関心を持ったことで遊ぶことができる <input type="checkbox"/> 運動場の遊具や砂場等で遊ぶことができる <input type="checkbox"/> 複数の友達と会話をしながら遊ぶことができる
主な活動の流れ	①遊具や砂場等で、みんなで楽しく遊ぶというめあてを持つ。 ②廊下を安全に通る仕方を確認する。 ③上履きを履き替える仕方を確認する。 ④運動場に出て遊ぶ。 ⑤友達と遊びながら、友達や教師と会話を楽しむ。 （遊び方・楽しいと感じたこと・面白いと思ったこと） ⑥うがい・手洗いをして教室へ戻る。
安心感を持った児童の姿	<input type="checkbox"/> 自分が興味・関心を持ったことで遊んでいる。 <input type="checkbox"/> 複数の友達と一緒に遊んでいる。 <input type="checkbox"/> 遊びながら、友達や教師と会話ができる。 <input type="checkbox"/> 思い切り体を動かしたり、笑顔で会話をしたりしている。

イ 第2期：新たな生活（ルール）をつくること

入学初期の給食は、6年生が1年生の配膳や片付けの補助をすることが多い。それは、入学前の給食経験の差や時間的な面から考えると、配膳や片付けの全てを、最初から1年生に任せることは難しいと思いがちだからである。

しかしながら、児童は配膳の様子を見ることで手伝ってみたいになったり、自分でしてみたいになったりする。そこで、6年生と一緒に配膳や片付けをした経験を通して、児童一人ひとりが考えていることや感じていることの違いを共有し、そこから見いだした課題を考えることで、自分たちの給食という意識を持たせるようにしたい。

第7表は、入学後の給食経験を基に、自分たちの力で配膳や片付けをし、楽しく給食を食べることについて考えることをねらいとした学級活動における活動案である。

第7表 学級活動案

題材名	給食当番のやり方を決めよう
活動のねらい	入学前までの給食の経験の有無や違いを確かめるとともに、新たに経験した給食を振り返り、自分たちで給食の配膳や片付けができ、楽しく給食を食べるための方法について考える。
いかしたい経験や考え方・感じ方の違い	○6年生と一緒に配膳や片づけをした経験 ○配膳や片付けで自分がやってみたいこと ○配膳や片付けで、自分たちができそうなことと不安なこと
主な活動の流れ	①給食開始から数日間の給食の様子を振り返る。 ・配膳、片付け、食事中等、場面に分ける。 ②配膳や片付けで不安なことや心配なことについて話し合い、クラスの友達がどのような気持ちになっているか受け止め合う。 ③経験したことを基に、配膳や片付けの中で、自分たちの力でできそうなことを考える。 ④楽しく給食を食べるための方法を考える。
新しい生活（ルール）づくりに向かう児童の姿	○幼稚園や保育所での経験を話している。 ○友達の話聞いている。 ○こぼれないようにするための運び方に気付く。 ○熱いものや汁物をよそるときは手伝ってもらわなければならないことに気付く。 ○順番を守って配膳したり片付けたりするなどのルールを考えようとしている。 ○互いに気持ちよく食べるためには、マナーを守って食べるとよいことに気付く。

ウ 第3期：学習に主体的に取り組むこと

小学校学習指導要領解説音楽編には、「低学年の児童は、楽曲を楽しんで聴き、模倣して演奏しようとする傾向がみられる。こうした児童の実態を踏まえ、楽曲の気分を感じ取り、それを表現に生かし、思いをもって演奏するようにすることが求められる」（文部科学省 2008b）との記述がある。

児童が主体的に活動に取り組むようになるには、楽曲から感じ取った気分やリズムをいかし、「楽しそうな気分を演奏したいな」、「ここは強く演奏したいな」というような思いを引き出し、表現を工夫する楽しさを味わわせることが大切である。

第8表は、音楽科の楽曲に対する自分の思いをいかして、体や楽器を使って演奏を楽しむ活動である。

第8表 音楽科活動案

題材名	リズムにのってあそぼう
活動のねらい	○楽曲の気分を感じ取ったり、自然にリズムを取ったりしながら、範奏を聞くことができる。 ○楽曲の流れに合わせて速度や強弱に気を付けながら、体やカステネットを使って簡単なリズム打ちをすることができる。
いかしたい児童の思いや願い	○範奏から感じ取った気分やリズムを表現したい ○歌に合わせてリズム打ちをしたい ○友達と一緒に演奏したい
主な活動の流れ	①範奏（歌）を聴きながら、曲の気分を感じ取ったり、リズムを取ったりする。 ②感じ取った気分を表現にいかしながら歌を歌う。 ③簡単なリズム譜を見ながら歌に合わせて、手でリズム打ちをする。 ④カステネットでリズム打ちをする。 ⑤友達とリズム打ちを聴き合ったり、一緒に演奏したりして、演奏の楽しさを味わう。
主体的に学習に取り組む児童の姿	○範奏を聴きながら手や体を動かしている。 ○歌を歌いながら、リズム打ちを楽しんでいる。 ○感じ取った気分を表現にいかして自分なりにリズム打ちをしている。 ○リズム譜を見て、同じリズムで演奏しようとしている。 ○感じ取った気分を表現にいかしながら、友達とリズムを合わせて演奏している。

(4) 実践上の配慮事項

ここまで示したスタートカリキュラムは、第1学年担任だけの取組では十分な効果は期待できない。そこで、校内体制づくり、幼稚園・保育所との連携、取組の継続の3点について、実践上の配慮事項を述べる。
ア 校内体制づくり

入学初期の朝の時間帯は、第1学年担任が児童と一緒に過ごすことができる環境を整えたい。例えば、朝の打合せに出席せずに各教室や昇降口等で児童の様子を見守り、必要に応じて支援や指導を行うことが考えられる。緊急の内容を除き、打合せ内容は中休み出席者から報告を受けることで、児童と一緒にいる時間を確保できる。

また、入学初期の各種提出物の対応に補助を付けるといった工夫も考えられる。これは学校によって対応が難しいことも予想されるが、担任が各種提出物の対応をしている間、児童がただ待つような状況があると、児童の学習意欲は低下するので、可能であるならば、各種提出物の回収が終わるまで、対応したいものである。

イ 幼稚園・保育所との連携

この点については、これまで各地区で参観や交流活動、情報交換等の取組が行われてきたことをいかながら連携を図っていくことが基本となる。

その際に大切なことは、参観や交流活動、情報交換の目的を明確にすることである。また、幼保小で目的

を共有した中で実践し、実践から得た成果を必ず互いの教育活動に反映させることである。

ウ 取組の継続

取組を継続させるために有効な手立ての一つとして、記録を取り、それを蓄積していくことが挙げられる。

例えば、入学期の週案であったり、児童の具体的な姿や様子、特に表面的な言動だけでなく児童の心の動きを見取って、座席表や記録用のノートに記述したりすること等が考えられる。また、交流授業や情報交換会等の実施内容だけでなく、反省やその後の教育活動にいかした具体例などの記録が、次年度へ役立つ情報となる。ここで気を付けたいことは、記録をすること自体が目的とならないようにすることである。適応の状況を判断したり、日々の教育活動や次年度の取組の充実に活用したりすることを想定して、記録を取ることが大切なことである。

研究のまとめ

1 研究の成果

入学期における児童の小学校生活への適応を図るためには、環境を通して行うという、幼児期の教育の考え方を取り入れた学習を展開することが有効であることが分かった。その効果を発揮させるには、幼児期の教育において児童がどのような教育を受け、その中でどのような力を身に付けてきているのかを理解しなければならない。また、新入学児童を短期間で小学校教育に引き込もうとするのではなく、長期的な視野に立ち、見通しを持って、徐々に適応を図っていくことが重要である。

このようなスタートカリキュラム作成に向けて大切にしたい考え方を、入学期の児童の実際の姿に照らして整理できたことが、2年間の成果である。

本稿では、具体的な活動案を示してはいるが、大切なことは、活動案をそのまま実践することではなく、その考え方を理解することである。各学校の状況により、活動案を修正して活用して欲しい。

2 今後の展望

本研究は、校種間連携・接続につながる研究である。2年間の研究を通して、本研究の成果から見られる考え方は、幼小のみならず、小中、中高の連携・接続にもつながると感じている。小学校の入学期に幼児期の教育を理解したように、中学校の入学期においても、小学校教育について理解を深めることで、入学期における生徒への対応が変わってくるのではないだろうか。また、授業改善の視点から言えば、既習内容や身に付けている力を把握することにより、どの校種においても、児童・生徒が活躍できる場や力を発揮できる活動などを、教師が構想できるようになり、主体的に学ぶ

児童・生徒を育むことにつながると考える。

おわりに

学校教育法の一部改正により、幼稚園が最初に入学する学校と規定されたことから分かるように、幼児期の教育は小学校教育の基盤となる。子どもの発達や学びの連続性を保障するためには、幼児期の教育で培われてきた学びのバトンを、小学校教育がしっかりと受け継ぐことが重要である。そのためには互いの教育を理解し合うことは必要不可欠なことである。

今後、幼保小連携・接続はますます注目されるであろう。本研究の成果が、これからの入学期の指導の在り方を見直す視点の一つとして、小学校教員の役に立てば幸いである。

なお、研究を進めるに当たり、ご指導・ご助言を頂いた文部科学省の津金美智子教科調査官、ご協力頂いた港小学校・港幼稚園・須賀保育園・松風幼稚園・花もんもん保育園の先生方に感謝の言葉を申し添えたい。

[参観・聞き取り調査を行った学校・幼稚園・保育所]

平塚市立港小学校

平塚市立港幼稚園

平塚市立須賀保育園

平塚学園松風幼稚園

社会福祉法人徳栄会花もんもん保育園

[助言者]

文部科学省

津金美智子

引用文献

文部科学省 2008a 『小学校学習指導要領解説 生活編』 日本文教出版

文部科学省 2008b 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 教育芸術社

文部科学省 2010 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」 p.4、p.29
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf (URLは2014年3月取得)

参考文献

文部科学省 2008 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館

厚生労働省 2008 「保育所保育指針解説書」 フレーベル館

篠原孝子・田村学 2009 「こうすればうまくいく！ 幼稚園・保育所と小学校の連携のポイント」 ぎょうせい